国際標準論理文章能力検定　レベル8−9　2015年度　第2回　解答と解説

測定する能力				
漢字・語彙力	論理的言語力	論理的読解力	論理的思考力	論理的表現力
漢字や語彙を使いこなす力。漢字を使って論理的な文章を組み立てる力。	日本語を論理的に扱う能力。一文の構造を論理的につかまえたり、「ことばのつながり」、指示語・接続語などを論理的に扱う力。	文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的関係、段落と段落との論理的関係、文章全体の論理構造を把握する力。趣旨を的確に把握し、小説などを客観的に読む力。	文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に説明する力。思考し、自分の考えをおもに記述力・論述力。論理的に書く力。	他者に向かって、論理的に話す力。論理的に思考し、自分の考えを論理的に書く力。

＊＊＊

《問題Ⅰ》 漢字・語彙力 （40点）

●解答

第一問
(1) 震・振　(2) 殖・飾　(3) 網・盲
(4) 扇・鮮　(5) 監・勘

第二問
(1) 抗　(2) 響　(3) 維　(4) 摘
(5) 杯

第三問
(1) 濃縮　(2) 警笛　(3) 尋常
(4) 干拓　(5) 夢想

第四問
(1) 劇団が日本各地を巡業して回る。
(2) 飛んでくる矢を盾で防ぐ。（盾で飛んでくる矢を防ぐ。）
(3) あなたの健康と幸せを祈念します。（あなたの幸せと健康を祈念します。）
(4) 一瞬も目が離せない試合で手に汗握った。
(5) 善い行いをして天の采配を待つ。

■配点
第一問　各2点　第二問　各2点
第三問　各2点　第四問　各2点

◆解説
第一問
同音異義語の問題です。単漢字にはそれぞれ意味があります。文脈の中でどの単漢字が適切かを考えましょう。

第二問
文脈の中での語句の意味を考えましょう。

第三問
漢字の基本的な使い方。文脈から意味を考え、選択肢の中から適切なものを選んで、漢字に直します。

第四問
まず付属語を自立語につけて、文節を作ります。次に主語と述語をつかまえ、後は言葉のつながりを考えます。
(1)「劇団が」→「回る」が主語と述語。「日本各地を」→「回る」、「巡業して」→「回る」とつながります。
(2) 主語が省略されているので、「矢を防ぐ」が要点。
「飛んでくる」→「矢を」、「盾で」→「防ぐ」とつながります。
(3)「祈念」＋「します」と、サ変動詞を作ります。目的語は「健康と幸せを」。
(4)「離せない」「握った」と二つ述語になる言葉があるので、「目が離せない」「手に汗握った」と言葉をつなげます。次に、「目が離せない試合で」→「手に汗握った」と順番を決めます。
(5)「して」「待つ」と述語になるものが複数あることに着目。「善い」→「行いを」→「して」、と「天」→「の」→「采配を」→「待つ」と言葉がつながります。

＊＊＊

《問題Ⅱ》 論理的言語力 （40点）

●解答
第一問 (1) ウ　(2) イ　(3) オ
第二問
日常生活にしか関心を抱かない人（詩歌の世界に関心を抱かない人）。
第三問 (1) キ　(2) エ
第四問 (1) ｂ　イ　(2) ｅ　エ　(3) ａ　カ

■配点
第一問　各4点　第二問　8点
第三問　各4点　第四問　各4点

◆解説
第一問
(1)「私は」→「なりたい」が主語と述語。何になりたいかというと「学者に」。その「学者に」に「遺伝子を」「研究する」と説明の言葉が付いています。さらに「将来」→「なりたい」とつながっています。
(2)「論理とは言葉の使い方である」と、一文の要点をつかまえます。「規則に」→「従った」は「言葉」ではなく、「使い方」につながっていることに注意。
(3)「お腹は」→「山のようだ」が主語と述語。「彼の」→「お腹は」、「まるで」→「山のようだ」、「とても」→「小さな」→「山のようだ」とつながっています。

第二問
直前の「初めからこの穴の存在を知らないか、また知っていても別にそれを捜そうともしない」人、「穴を見つけても通れない人」を指していますが、「比喩ではなく」とあるので、「穴」という言葉を使うことはできません。「穴」とは詩歌の世界のことです。

第三問
(1)「宇宙の秘密」「星雲」「星と太陽」などから、「科学者」が答え。
(2) 唄いたくなったとあるが、「句が句を誘うた」とあることから、ア「作曲家」は×。実際に寺田寅彦は物理学者であり、文学者でもあった。

第四問
(1) 電気人形が「口をぱくぱくと動かし」たあと、「くるりと右へ回って同じ挙動を繰り返す」のだから、順接。
(2) 役者が「生きた人間の運動と器械人形の運動との相違を、かなり本質的につかんでいる」の具体例が空所直後に来るから、「たとえば」。
(3) 空所直前の「この役者は～知らない」に対して、直後では「科学者の眼でなければならない」とひっくり返しているから、逆接。

＊＊＊

《問題Ⅲ》 論理的読解力 （40点）

●解答
第一問 C→E→A→D→B
第二問 最後に因果
第三問 (1) ク　(2) キ　(3) イ　(4) コ
(5) オ
第四問 (6) ウ　(7) オ

■配点
第一問　10点　第二問　10点
第三問　各2点　第四問　各5点

◆解説
第一問
各段落の冒頭に着目しますと、B「そし

て」、D「実は」、E「たとえば」とあることから、それ以外のAかCが最初に来ると分かります。Aはニュートンの万有引力の話で、「イコールの関係」の具体例。そこで、Cから始めることにします。

Cでは論理とは「イコールの関係」「対立関係」「（　4　）関係」と三つの規則に過ぎないと結論を提示しています。そこで、筆者はこの三つの規則を順次説明していくことになると予想できます。

Cの末尾で「イコールの関係」は学習済みであると述べているのですが、E冒頭の「たとえば」に着目すると、この段落がイコールの関係が学習済みであることの具体例だと分かります。

さらにEの末尾で抽象と具体の話が出るのですが、その具体例がAの万有引力の法則です。Dも「イコールの関係」が言葉そのものの中に含まれているという話。

次に、筆者は「対立関係」を説明するはずですが、それがBだと分かります。

第二問　Fと範囲を指定する条件があることに注意。次に欠落文に「そこが」と指示語があることから、「他の動物と決定的に異なる」点について述べられている箇所を探します。Fの冒頭で私たち人間は混沌たる外界を「イコールの関係」「対立関係」で整理していることが他の動物と異なる点だと分かるので、その直後に挿入します。

第三問　(1) リンゴが落ちたのは、「現象」。
(2) 直後の「一般」の対義語を選びます。
(3) 男と女は「対立関係」。
(4) 論理とは三つの規則ですが、この三番目の規則は段落Fで「最後に因果関係ですが」と述べられています。
(5) 「男」という言葉はA君、B君C君の「共通」点を抜き取った言葉。

第四問　(6)は「イコールの関係」、(7)は「因果関係」の具体例。

《問題Ⅳ》 論理的思考力　（40点）

＊＊＊

●解答

第一問　(1) ない　実験の
(2) 金　高級

第二問　母は料理番組や歌番組など、毎日テレビを見ます。
（母は毎日、料理番組や歌番組などのテレビを見ます。）

第三問　建物が描いてある色彩が華やかなきれいな絵。

第四問　昔は書くというのは個人に向けてだったが、今や不特定多数に向けてになった。

第五問　小説は言語から様々な情報を読み取り、経験したことのない社会や世界、血の通った人間を脳裏に創造していくので、言語訓練として有効である。

■配点
第一問　各5点　**第二問**　5点
第三問　5点　**第四問**　10点
第五問　10点

◆解説

第一問　(1) 科学の進歩は科学者の持続的な努力で成り立つ。「科学の進歩は成り立つ」が一文の要点。「科学者の」→「持続的」＋「な」→「努力で」とつながります。
(2) 私はいつも安物買いの銭失い」という慣用表現を頭に置きます。

第二問　三文とも主語が「母は」で、述語が「見ます」。残りの要素である「料理番組」「毎日」「テレビを」「歌番組を」を入れ込みます。「料理番組」「歌番組」を一般化したのが「テレビ」。

第三問　「読点は使わないこと」という条件が大切。すべてが「絵」にかかるように、語順を考えます。「きれいな建物」「きれいな色彩」とならないためには、まず「きれいな絵」とします。「色彩が華やかな建物」も駄目なので、「建物が描いてある」→「色彩が華やかな」→「きれいな」絵となります。

第四問　自分の感覚で要点となる言葉を取り出すのではなく、あくまで言葉の規則に従って問題を処理します。

「昔」と「今」が対立関係。「昔」＝「個人に向けて」、「今」＝「不特定多数の読み手に」が文章の要点。

第五問　筆者の主張は、小説が「言語訓練として有効」。その理由が「無味乾燥な言語から～創造していくのだから」まで。とくに理由を表す「だから」に着目。あとは、理由に当たる箇所から余分な言葉を削っていきます。

《問題Ⅴ》 論理的表現力　（40点）

＊＊＊

●解答

第一問　ア

第二問　海や川に出かける人が増える以上、事故も多発するのは当然だから

第三問　イ

第四問　身長が高く体重が重いのは女性より男性の方なので当然女性よりも平均寿命が短くなる

■配点
第一問　5点　**第二問**　15点
第三問　5点　**第四問**　15点

◆解説

現在はネットによる情報社会で、膨大な情報が世の中に溢れかえっています。その真偽を確かめることなく、ただ情報に流されるだけでは、この現代を賢く生きていくことはできません。そのためには因果関係を理解する訓練が必要になってきます。

まずは問題文を理解し、その中で規則を取り出し、その規則に従って具体的な事例を処理していきましょう。

第一問　原因Aが「お盆は霊がこの世に戻ってくる」で、結果Bが「水の事故が多い」ことです。「お盆は海水浴客が多い」は、Aに影響を与えているわけではないので、イ「第三の原因」ではありません。「お盆は霊がこの世に戻ってくる」という一見目立つ出来事に引かれて、本当は原因ではないのに、原因だと錯覚してしまったのです。

第二問　本当の原因は海や川に出かける人が、お盆には増えることです。父のセリフ「勤め人の休みはお盆に集中している」「去年のお盆に家族で行った海だって、芋の子を洗うような大混雑だった」から判断します。

第三問　空所直前に「その陰に潜んでいる別の要因が双方に影響を与えている」から、イ「第三の原因」。

第四問　ここでは別の要因を考えます。「男性」という言葉を使うのがヒント。「男性」は「女性」よりも一般的に身長が高く、体重も重いのに対して、「平均寿命」は女性の方が長いのです。